

総合シンポジウム

“文化運動”まして“駿台祭”大学祭なるものが……

「免罪符は既に色あせた」混迷と消耗の日々の一瞬。こう呟いてみるのがあった。微速前進の長かった今、バリケードがカルチャータンが遠のいて今。振り返りに備え、研ぎすました切っ先と肉体と暴力とを不特定現在に用意していなければならぬ今。

ならず者たちが、意を決し、祭事の腹黒い企みに群れる時、古傷を切りさいなむかの、その新たな傷は未だ血をしたたらせている。漠とした期待が、騒乱が、そして“文化運動”が、急ごしらえの安物の空間を慌しく回転して行く。

その終幕は、日曜の朝方6時頃の新宿の按配。塵芥のみ多くて、重苦しい物が再びならず者たちを把え始めて居て、あっけらかんと眩しい灰色の朝日の夜明が訪ずれると、ならず者たちは、四散して行く。

69年対権力バリケード闘争が展開して行く中で、それなりのサークルに集っていた部分が多様な形で取り組み、さらにその後の連続的な緊張関係が持続して行く中である意味での“サークル活動”が停止し、そしてその後情況との関係性の地平で行なわれることがなかっただけに、現代的に3・4年部分の大幅な欠落という断層を産み、大学立法の成立とともに、学内ロックアウト体制が、日共＝民青の「自主規律」反トロキャンペーンという全面的敵対と当局への拝跪を膨みながら、確立されてゆき、サークル部分への更なる追撃となって行った。活動の物質的空間すら奪われた時、極めて前提的部分の検証と構築を含めた、全面的再編が待たれることになった。

大学祭が粹砕を叫ばれ、空疎さを指摘され、実際に一定の緊張関係の中で物理的に“粉碎”が行われたことはあっても、毎年執拗に行なわれてきたし、それは“粉碎”の論理の破綻はともかくとして、研究部連合会として活動するサークルの、いわゆる駿台祭を前提的に置いた周期的な活動の一端としての要請が1つにはあるし、漠とした“祭”への郷愁があった。文化、芸術対象への想像力の被抑圧側面の擬似解放の志向、馬鹿騒ぎへストレートな烏合、それら日常の執着の捨て切れぬものとしてあったかもしれぬ。あるいは党派的資金、活動家獲得の一手段として。

駿台祭実行委員会の旗の下、再びならず者たちが群れている。映画やら、シンポジウム、模擬店と麗かな装いを観せるこの空間、それらが各々、継承ということを前提的に語られ、連続性を志向したことがあったろうか。確かに存在したに違いない。「語るものが」、今再びそれを問うと言うのだ。何の内実をもって、思想、質、かけているのか。

そこで一つ、駿台祭というわく組みの中に、サークルと実行委員会が“企画”が共存すると言う形で在っても、ほぼ確実にその両者は相互媒介といった方向を現代的に目指すことが少なかった。実行委員会が、それ自体として自立を志向し連続性を目指す。それは研究部連合——サークル集約部分——と差異を持ち、サークル部分と訣別もしかねない。

今、学園内部において企画団体としての実行委員会がその一発デッチ上げ的性格を止揚して行くとはいかなることなのか。どのように目指されるべきなのか。それは学園内部から地区への行くのか。明確に学園を拒否した形での自立なのか。もちろんそこに実行委員会自体学園に規定されているという現実があるとしても。学園内外からの主体的な文化運動を志向している部分を結集しての圧倒的な討論を獲ちとろうと思う。